

地域との連携

地域の発展に向けた取り組み

地域とともに共同研究成果を売込む

キーワード：共同研究・国際・食品・物産展・地域連携・地域リーダー

本事例の関係者

帯広畜産大学
研究国際課
地域共同研究センター
畜産フィールド科学
センター
帯広商工会議所
文部科学省産学官連携
コーディネーター

十勝の連携の中心は地域共同研究センター

【要約】

十勝の食料自給率は400%を上回り、年間の農業生産額は2600億円前後で全国でも有数の農業地帯である。しかし、ほとんどの農産物は原料として販売され、付加価値を高める食品加工産業は今後その成長を期待する状況にある。

この食品加工産業を育成するために、本学は共同研究により新製品開発や技術移転を積極的に進めている。完成した新商品は地域のイベントにおける出展や、新聞などによる情報発信を行っているが、この効果にも限度がある。

そこでコーディネーターは、大消費地へのアプローチとして国際食品・飲料展への参加を企画し、十勝の企業とともに共同研究の成果である商品の出展を行った。この出展が㈱三越の企画担当者の目に留まり、本学が「北海道物産展」への出展を取りまとめることになった。物産展は大変好評で企業が出展したほとんどの商品が完売となった。

しかし、参加企業にとっての当物産展は、出前販売のノウハウが複雑に絡むことや、あらゆる客層に 대응することができる店頭販売の難しさを習得することができ、今後の商品販促を考えるうえで貴重な体験を得ることができた。

【きっかけ】

国際食品・飲料展は、とち財団が中心となり7年間継続して出展してきた。コーディネーターは、一部には出展の効果がないとの批判もあったが、「継続は力なり」を合言葉に出展を継続してきた。

タイトルを「十勝物産館」とした大学が取り仕切る唯一のブースである。このブースで共同研究成果や文部科学省都市エリア産学官連携促進事業の成果物を紹介したことがきっかけとなり、㈱三越とのコンタクトができた。

【段取り・プロセス】

1. ㈱三越との基本的な出展条件の確認
場所、面積、三越の利益、販促方法、情報提供など販売に伴う基本的な条件を検討して確認した。
2. 出展希望企業の募集と選定
出展を希望する企業は、三越の担当者に各社10～20分間の時間で販売したい商品の特徴や訴求点をプレゼンテーションし、これを受けて三越は物産展のイメージ、競合関係、売り場面積などを勘案して出展企業を選定した。
3. 参加企業の確認
選定された企業の販売員の人数を調整して、不足あるいは期間中に不在の企業のチェックを行い、販売員の過不足調整を行った。参加企業には自社の商品販売のみにとらわれず、地域ぐるみの販売協力と相互扶助を依頼した。

【成果・結果や活動後の変化】

1. 参加企業は計画していた販売量が達成でき満足であった。
2. 地域が一致団結して目標に向かうことで協力体制も構築できた。
3. 国際食品・飲料展の展示を強化するために金融機関の支援を受けることができた。
4. 継続出展を希望する企業が多いため、次回も北海道物産展への出展を計画している。



三越北海道物産展

地域連携で プレゼンス向上

1. 対面販売の難しさを学習できた。
2. 共同研究成果に対して消費者の高い評価が得られた。
3. 地域が協力する体制ができた。
4. 十勝・帯広畜産大学のプレゼンスが向上した。

成功の事例

共同研究成果の“見える化”に成功

●産学官連携の成果の評価は売上げがあって始めて評価される

地域の企業、特に食品産業は産学官連携による食品等の研究開発に熱心である。しかし、商品開発に成功しても販売体制が十分ではない。これは地域企業が持つ共通認識であり、各方面から販売力の強化が叫ばれてきた。しかし、今までこの課題を解決するための具体的な方針や方向性を導くことはできなかった。

一方、企業は共同研究の成果物である商品の売上げを増すことにより、産学官連携の成果を評価するのが通例である。本学はこの視点に立って、産学官連携を推進する必要がある。このように、共同研究から販売まで一貫した連携体制を構築したことが、WinWinの関係をもたらすことになった。

●地域連携と成功事例の構築

地域が連携するためには相互扶助の精神を醸成する環境づくりが求められる。今回は㈱三越の事業を通じて地域がそれぞれ補完し合う効果ある連携構築につながった。この連携の輪を拡張し次の事業へと発展させるためには、今回のように身の丈にあった成功事例を着実に積み上げることである。そこに地域の変革につながる新しいエネルギーが生まれ、特徴のある地域連携が可能となる。

地域との連携



国際食品・飲料展

失敗の事例

事業化へ向けた軌道修正のタイミングずれ

●名選手、名監督にあらず

産学官連携の研究プロジェクトにおいて、リーダー選出の議論は十分尽くされていない現状がある。一般的に、著名な研究者を選任するケースが無難であり多いようである。産学官連携プロジェクトは、入口から出口まで進む軌道上で研究計画が遂行され、その結果として研究成果を得ることができる。この過程で企業には、研究成果をいち早く商品化につなげ、市場においてその商品価値を高めることが重要である。研究者は研究過程において新たな発見があれば、そちらに目が向かい、研究軌道が反れて出口に到達する時間に遅れが生じるおそれがある。これが現実になると、大学と企業との間に軋轢が生じ、企業の事業化への不安は増幅する。

コーディネーターは、この軌道のブレを修正する唯一のプロジェクトリーダーであり、軌道の揺れを迅速に感じ、大きく揺れる前の調整能力が求められている。

成功と失敗の 分かれ道

プロジェクトリーダーは共同研究を推進し、商品化の入口から出口に行き着く軌道の振れを適宜修正しなければならない。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

多様で多角的な地域連携をさらに拡大

帯広畜産大学地域共同研究センターは、技術相談から商品化への共同研究のための道標を提案する。その道標は、研究成果をできる限り販売につなげ、参加するメンバーが達成感を受け止め、次への躍進のエネルギーにできる地域にすることである。

この地域は工業技術の集積に課題がある。この課題を解決するために、特許流通アドバイザーと連携し、双方でお互いの活動を補完し企業の課題や悩みに的確に応え、課題解決の提案のできる体制を構築する。また、企業の課題や悩みの発掘は地域力連携拠点支援事業のコーディネーターが担当する。あがってきた課題等は特許流通アドバイザー、地域力連携拠点コーディネーター、およびコーディネーターが定期的に協議して一致して解決にあたる。これにより、産学官に金融を加え、さらに知財まで参加する連携体を構築して、地域の発展を推進する。

☆コーディネーターの一言

十勝は食料自給率400%を越える農業地帯であるとともにWTOやFTAの影響をまともに受ける地域である。食品産業を活性化させて足腰の強い地域を作っていきたい。